

大学院生によるアメリカの小中学校での 体験型海外教育実地研究報告 X

小原 友行・深澤 清治・朝倉 淳・松浦 武人・

松宮 奈賀子・阿比留 久美*・兒玉 泰輔*・茂松 郁弥*・

志摩 愛里*・平野 優輝*・山本 稜*・吉川 友則*・奥田 麻衣子**

(2016年12月22日受理)

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students
in Elementary/Secondary Schools in the United States (X)

Tomoyuki KOBARA, Seiji FUKAZAWA, Atsushi ASAKURA, Taketo MATSUURA,
Nagako MATSUMIYA, Kumi ABIRU, Taisuke KODAMA, Fumiya SHIGEMATSU,
Airi SHIMA, Yuki HIRANO, Ryo YAMAMOTO, Tomonori YOSHIKAWA and Maiko OKUDA

Abstract. This short paper reports on the 10th overseas teaching practicum in the United States by 8 graduate students of Hiroshima University, Japan, partly organized by Hiroshima University Global Partnership School Center (GPSC). This year marks the 10-year anniversary of this project since its start. This year's participants were students of Graduate School of Education and Graduate School for International Development and Cooperation (IDEC). They observed and conducted lessons in English in four local public schools in North Carolina. This project had the following three aims: 1) to self-develop practical instructional competence by teaching pupils with different cultural backgrounds; 2) to enhance the abilities in developing teaching materials through hands-on teaching experiences in English; and 3) to acquire the abilities to design, implement and evaluate programs for promoting global partnership. Like previous years, their teachings were very positively covered by the local newspapers and websites. Later, the project was followed by cross-cultural field study visits to NC State Capitol, Raleigh and the U.S. Capitol, Washington, D.C. It is hoped that this intensive experience will raise the prospective teachers' global awareness and confidence in teaching.

Key words : global education , overseas teaching practicum , crosscultural understanding

1 はじめに

「体験型海外教育実地研究」は、広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター(略称はGPSC)が開発し企画・

実施しているプログラムであるが、本年度は記念すべき第10回目の実施となる。本年度は、大学院教育学研究科博士課程前期1年の大学院生7名と国際協力研究科博士課程前期2年の大学院生1名の合計8名が登録し、授業開発に取り組んだが、ビザ取得に関する原因不明のトラブルで、1名が

* 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

** 広島大学大学院国際協力研究科博士課程前期

渡航直前に辞退することになり、米国での授業実践は7名となった。

本年度も例年のように、4～8月の事前の教材研究、9月16日～26日の米国での教育実地研究(ノースカロライナ州グリーンビル市内の公立のウォールコート小学校・エルムハースト小学校・C.M.エッペス中学校での授業観察および教育実習とイーストカロライナ大学での大学院授業の参加と受講大学院生との交流、州都ローリー市内のイクスプローリス小学校および同中学校での授業見学と校長・教員との意見交流、そして博物館を中心とした教材調査、首都ワシントンDCでの多文化理解学習のための教材調査)、そして帰国後10～11月の事後研究による教材の完成とレポート作成、そして12月14日の成果発表会となっている。

また、本年度も、7月16日に開催された「グローバル時代における教員養成の将来～体験型海外教育実地研究からの提案～」をテーマとした第12回の学校間交流国際フォーラムのために来日してもらった、GPSCのパートナー校であるイーストカロライナ大学教育学部のサンドラ・ウォーレン先生、実習校であるエルムファースト小学校のアンドレア・フレミング先生とケイシー・ウェスター先生の協力を得て、7月17日に行われた授業研究ワークショップにおいて、事前の指導案検討を綿密に行うことができた。

なお、本年度の取り組みについては、10回目の実施ということもあり、グリーンビル市内の新聞社「The Daily Reflector」の取材および報道もあり、現地でも注目された。以下では、本年度の教育実地研究の概要、参加者の報告、評価について紹介していきたい。

2 2016年度「体験型海外教育実地研究」の概要

(1) 全体日程

2016年度、本授業科目の実施状況(全体日程)は以下のとおりであった。

- 4月 7日(木) 本授業の概要と計画説明
- 4月 27日(水) 授業研究テーマ事例の考察および渡航のための諸手続きの確認
- 5月 23日(月) 授業研究テーマ案の交流・設定
- 6月 7日(火) 学習指導案の検討(1)
- 6月 16日(木) 学習指導案の検討(2)
- 7月 11日(月) 学習指導案(英語版)の検討(1)
- 7月 12日(火) 学習指導案(英語版)の検討(2)
- 7月 16日(土) 第12回学校間交流国際フォーラム参加

- 7月 17日(日) 2016年度「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップ参加
- 8月 4日(木) 学習指導案・教材・教具の検討および渡航のための諸手続き
- 8月 30日(月) 準備状況の確認、教材集・報告書の作成・報告会についての確認、渡航に関する書類提出
- 9月 12日(月) 渡航前最終打合せ
- 9月 16日(金)～9月 26日(月) 米国における「体験型海外教育実地研究」
- 12月 14日(水) 「体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

(2) 現地での日程

- 9月 16日(金) 広島出発、成田泊
- 9月 17日(土) 成田出発、米国ノースカロライナ州グリーンビル到着
- 9月 18日(日) 授業準備および授業打合せ
- 9月 19日(月) グリーンビル現地学校訪問(観察)、イーストカロライナ大学教材開発センター見学、同大学学生との交流
- 9月 20日(火) グリーンビル現地学校訪問(授業実施)
- 9月 21日(水) イーストカロライナ大学の授業参加、ローリーへ移動
- 9月 22日(木) イクスプローリス中学校・小学校見学
- 9月 23日(金) ローリー市内(博物館等)研修、ワシントンへ移動
- 9月 24日(土) ワシントン(スミソニアン博物館等)研修
- 9月 25日(日) ワシントン出発、機内泊
- 9月 26日(月) 広島到着

(3) 参加者およびグリーンビルにおける配置

上述したように、本年度の「体験型海外教育実地研究」の授業には8名の院生が参加したが、米国で授業を実施することができたのは7名であった。なお、参加大学院生の渡航費用や滞在費はすべて自己負担となっている。

参加学生の現地での学校配置、担当者、参加者、引率教員は以下のとおりである。参加者は事前に準備した授業を各校において実施した。

【エルムハースト小学校(K-5)】

実施校担当者：ワンダ・ウィリアムズ先生

参加者：志摩愛里・吉川友則
 引率者：小原友行・朝倉淳
 【ウォールコート小学校 (K-5)】
 実施校担当者：シンディー・ワトソン先生
 参加者：平野優輝・阿比留久美
 引率者：松宮奈賀子
 【C.M. エッペス中学校 (6-8)】
 実施校担当者：アリソン・キリー先生
 参加者：奥田麻衣子・茂松郁弥・山本稜
 引率者：深澤清治

F	6	異文化理解 Let's think about original local "ekiben"
G	6	国際平和教育 Sustainability of World Peace Day
H	8	異文化理解 Let's play "shogi"!

※「教科等，題材・テーマ」は，参加者（授業者）が付したものであり，授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである。

※参加者 A は授業づくり，教材づくり等，渡航直前の準備までは行ったものの，諸事情によりアメリカでの実習に参加することが叶わなかった。

3 参加者の報告

参加者(8名)は，開発・実践した授業に関する「ねらい」，「概要」，「成果と課題」および授業の準備から実践を通じた「自己変容」について報告を作成した。

なお，渡航することができなかった参加者1名については，考案・開発した授業に関する「ねらい」，「概要」，渡航までの事前学習，フォーラム及びワークショップに参加しての「成果と課題」，「自己変容」について報告している。

次頁以降にこれらの報告を掲載する。

4 本年度の授業の整理と考察

(1) 本年度の授業

2016年度体験型海外教育実地研究(米国ノースカロライナ州)において実施された授業は，次の通りである。

表1 実施授業の学年と教科等

学生	指導学年	教科等，題材・テーマ*
A	3	異文化理解 Let's Play "Mamemaki"!!
B	3	図画工作科 Let's make a story of the moon!
C	4	異文化理解 Let's have an experience of Japanese footwear culture!
D	5	図画工作科 Let's design Olympic emblems of Greenville!
E	5	異文化理解 Let's write messages to Japanese school children

(2) 事前の取り組み

参加者は，日本での事前学習会において，授業の目標，内容，教材，学習過程などについて互いに協議・検討し，具体的な準備を進めた。また，英文の指導案を作成し，7月に実施した授業研究ワークショップにおいて，実習校であるエルムハースト小学校のアンドレア・フレミング先生，ケイシー・ウェスター先生，さらに本取組をサポートしてくださっているイーストカロライナ大学のサンドラ・ウォーレン先生より，教材構成についての助言や児童生徒の実態に基づく助言をいただき，指導計画の改善を図った。授業実施学年については，参加者の希望と指導内容を考慮して調整・決定した。さらに現地では，受け入れ校の関係教員と事前の打ち合わせ会を行った上で授業に臨んだ。

(3) 授業についての考察

本年度の授業について，主な成果と課題を以下に示す。

① 教材開発の状況と傾向

参加者は，各自の問題意識や専門領域の特性を生かし，新たな教材の開発を行った。特に今年度は，日本の小学校においても授業実践を行い，児童の作品やメッセージをもって交流活動を行うという授業を計画する学生が複数いたことが特徴的であった。アメリカで行う授業を単発で終えないこと，またアメリカの児童が活動やメッセージ作りに取り組む際の「相手意識」を持たせることにおいて有意義な取り組みであったと考える。この

第3学年 異文化理解 “Let's play‘Mamemaki!!!”

教育学研究科 教科教育学専攻 社会認識教育学専修 兒玉 泰輔

1 ねらい

授業のねらいとしては、大きく3つある。1つ目は、「節分」や「豆まき」という日本の伝統的な文化に触れてもらい、「豆まき」を行う意図を理解してもらうこと。2つ目は、自分の苦手なことを夢を自覚してもらい、苦手なことを「鬼」、夢を「福」として、「豆まき」行って、自分の苦手なことを克服して夢を叶えようと決意する時間にしてもらうこと。3つ目は、「豆まき」を楽しんでもらい、日本のことを好きになってもらうことである。

2 概要

- (1) 「節分」と「豆まき」の説明を、PowerPointを使って行う。「豆まき」を行うことで、鬼を追い出し、福を呼び寄せること、「豆まき」は「節分」で行われ、「節分」とは四季の変わり目であることを理解してもらう。
- (2) 自分の苦手なことや夢を書いてもらう。それぞれを「鬼」と「福」に見立てて「豆まき」を行う。「鬼は外―、福は内―」と言いながら実際の「豆まき」を体験しながら、日本語にも触れてもらう。
- (3) 実際に「豆まき」をした感想を述べてもらい、自分たちの苦手なことを克服し、夢を叶えることを再確認してもらう。

3 成果と課題

実際に授業を行っていないため、指導案作成の過程と交流フォーラムを通じた成果と課題を述べる。成果としては、大きく2点ある。1点目は、日本の文化を再確認できたことである。アメリカの子どもたちに「日本の伝統的な文化」を感じてもらった授業を計画していく過程で、日本の文化とは何なのか、その文化をどのようにしたら面白く体験的に理解してもらえるのかを考えることが出来た。それを通して、日本の文化を再確認できたと考えている。2点目は、実習校に先生方にアドバイスをもらい、アメリカの子どもたちの実態を加味しながら指導案を作ることができた。アメリカの子どもたちの語彙力や、興味関心などを把握できたことで、より子どもたちに分かりやすいように指導案を再構成することが出来たと考えている。

課題は、実際にアメリカに行って実践をしていないことである。諸事情があり実践を行っていないため、この授業を実際に行ってみて、アメリカの子どもたちが日本の文化をどのように理解してくれるのかを確かめていく必要がある。加えて、アメリカの教育現場を生で見て、日本との違いや共通する点などを感じたい。

【自己の変容】

体験型海外実地研究に参加して、参加前と大きく変わった点が1点ある。それは、海外で実際に行くことを想定して指導案を作ったということ自体である。これまで、アメリカの実践を見たり、読んだりしたことはあったものの、自分自身がアメリカで授業を行うことを想定して指導案を作成したことがなかった。アメリカの子どもたちが求めているものは何なのか、自分が伝えたいことは英語で伝わるのか、ということ意識しながら指導案作成を行った。このように、指導案作成を行う際に、今まで考慮したことがなかったことを考慮に入れながら指導案作成が出来た。そのため、「日本で教育を行う」という当たり前だった自身の中にある概念自体を揺さぶられるプロジェクトだった。今度は、実際にアメリカに行って実践を行いたいと思っている。

第3学年 異文化理解 “Let's make a story of the moon!”

教育学研究科 学習開発学専攻 カリキュラム開発専修 阿比留 久美

1 ねらい

本授業では、大きく以下の二つをねらいとした。

- (1) 月を見て感じたことから生き物やストーリーを自由に発想し、影絵を作る活動を楽しむことができる。
- (2) 月に対するイメージの違いに気づきそのよさや面白さを感じることができる。

2 概要

- (1) 導入では月見の文化から日本の月に対するイメージを伝えた。月の模様に対する日本の見方と作品のイメージを掴むことができるように事前に作った影絵を提示した。
- (2) 月の写真を見て、物語を想像し、ワークシートに記入させた。また、クレーターの模様から物語を想像しやすいように「誰が」「何をしている」という2つの視点で考えるように促した。
- (3) 事前に準備した台紙を配布し、児童が想像した物語から画用紙を使って影絵を製作させた。
- (4) 完成した作品に後ろからライトをあて、鑑賞させ、何人かの児童に作品と物語を発表させた。

3 成果と課題

成果物を見ると、多くの発想ができていた児童とあまりアイデアがなかった児童が見受けられたが、児童全員がオリジナルの物語を想像し、作品を完成させることができたことがよかった点として挙げられる。また、鑑賞の段階では、完成した自分や友達の作品を見て楽しむ姿が見受けられ、「すごい」、「きれい」などの声が多く上がっていたため、多くの児童が月のよさや美しさ、友達の作品の面白さに気付くことができていたのではないかと考える。

反省としては、二点挙げられる。一点目は、影絵には模様や色が反映されないことを事前に説明すべきだったことである。また、そうした予期せぬ事態に対する英語での説明が全くできなかったため、児童に伝わらず、先生方に助けていただくことになってしまった。二点目は、児童に問いかける場面を設定できていなかったため、活動以外の時間は一方的に教師側が説明するだけになってしまったことである。日本の文化を伝えたいという気持ちと限られた時間の中で活動に重きを置きたかったことが、結果として、児童とのコミュニケーションや児童の意欲をないがしろにしてしまったのではないかとということが心残りである。

【自己の変容】

アメリカでは、授業実践以外にも学校の先生方や児童と英語で話す機会が多く、英語が苦手な私にとって、最初は伝えたいことが伝わらないもどかしさや聞き取れない悔しさが大半であり、話すことに消極的になってしまっていた。しかし、コミュニケーションを取っていくうちに、私の拙い英語を一生懸命理解しようとしてくれる先生方や児童の姿が本当に嬉しく、もっと伝えたいという気持ちが強くなり、こうしたら伝わるかもしれない、こういう言い方をしたほうが分かりやすいかもしれないというように積極的に英語で話すことができるようになっていった。コミュニケーションにおいて重要なのは、お互いが理解し、理解されようとする気持ちであり、またその気持ちを相手に示すことであると学ぶことができた。言語やバックグラウンドが違ってそれが弊害ではなくむしろ知らないからこそその発見や楽しさがあることも今回の経験から実感することができた。

第4学年 異文化理解 “Let's have an experience of Japanese footwear culture !”

教育学研究科 教科教育学専攻 社会認識教育学専修 吉川 友則

1 ねらい

本授業のねらいは以下の3点である。一つ目は、日本のものについて知ってもらい、興味を持ってもらうこと、二つ目は、下駄を履くことが日本の夏の気候に合っていることを知ってもらうこと、そして三つ目は、伝統文化とそれを使った町おこしについて知ってもらうことである。

2 概要

- (1) 下駄は日本の伝統的な履物であり、とても独特な形をしている。昔は、日常的に履かれていたが、現在では、日常的に使っている人は少ない。しかし、今でも夏祭りや温泉地などで着物や浴衣を着たときに日本人が好んで履いているということを知る。
- (2) 私の故郷である福山は、下駄の生産で有名であったが、現在では、ほとんど生産されていない。しかし、下駄博物館を作ったり、ゲタリンピックを開催するなど、下駄という伝統文化を使った町おこしが行われているということを知り、伝統文化や伝統産業で町を活性化させる取り組みの関係性を知ってもらう。
- (3) 実際に、ゲタリンピックで行われているアクティビティを体験することを通して、日本の伝統文化である下駄に親しむとともに、地域活性化のための取り組みを体験する。

3 成果と課題

まず成果について述べる。本授業における成果として、子どもたちに下駄という日本の履物文化を知ってもらうことができたという点が挙げられる。実施クラスの子どもたちは、「日本人がどのような靴を履いているのか」ということに関心をもっており、日本人の多くが普段はアメリカの人たちと同じような靴を履いているということを伝えるとともに、日本の特徴的な履物として下駄を紹介することができた。また、下駄を実際に履いてみるという経験をしてもらうことで、経験的に下駄がどのようなものであるかを知ってもらうことができた。子どもたちは、日本の文化に対して最初からある程度の関心を持っていたが、経験をすることでより一層関心が高まったのではないかと考える。

次に課題についてである。本授業の課題としては、目標の三つ目に掲げている、伝統文化とそれを使った町おこしについて知ってもらうという目標が達成できなかったという点が挙げられる。本授業では、時間数も限られている中で、①下駄の紹介、②地元とその伝統産業の下駄の関係性、③下駄を使ったアクティビティという内容で授業を行い、特に子どもたちに下駄を体験してもらいたいという気持ちからアクティビティに時間をかけた。そのため、全体的に内容が薄くなってしまった。この課題を克服するためには、②と③のつながりを意識した授業展開を考える必要がある。

【自己の変容】

教育観の変容としては、授業における指示の準備の重要性である。特にアクティビティを行うときに、どのような支持をだして活動を行わせるのか、活動中にどのような声掛けを行うと効果的であるかなどを、事前に綿密に考えておくことの重要性に気付いた。今回は特に英語であるということも含めてそこに困難さを感じたが、これは日本における授業でも重要となるだろう。これから、アクティブラーニング型の授業が多くなることが予想される中で、教師の指示や声掛けというものは今までよりもより一層重要になっていくのではないかと考える。

異文化の子どもたちを相手に授業をすることは、今回はじめての経験であった。これからの教室のグローバル化が予想される中で異文化や多文化の中での教育というものを考えさせられた。

第5学年 図画工作科 “Let's design Olympic emblems of Greenville !!”

教育学研究科 学習開発学専攻 カリキュラム開発専修 志摩 愛里

1 ねらい

本授業のねらいは、リオデジャネイロオリンピックのエンブレムが、RIO という都市を表すアルファベットから構成されていることや、色がブラジルの国旗の色と一致しているという「地域性」の要素と、3人の人が手をつなぎ、人と人のつながりを表現しているという「オリンピズム（オリンピックの精神）」の要素からつくられていることを知り、この2つの要素を組み合わせ、自由に想像を膨らませながらグリーンビルのエンブレムをデザインすることである。

2 概要

- (1) その後の活動につながるように広島で有名なものについての紹介を交えながら自己紹介を行った。
- (2) アメリカで有名なオリンピック選手 LeBron James と Gabby Douglas をクイズ形式で出題し、子どもたちが発言しやすい雰囲気をつくるとともに、オリンピックに興味を持つことができるようにした。
- (3) エンブレムをデザインするための1つ目の要素である「地域性」について広島や日本で有名なものを紹介した後に、子どもたちにグリーンビルやアメリカで有名なものを考えてもらい、ホワイトボードに書いてもらった。
- (4) エンブレムをデザインするための2つ目の要素である「オリンピズム」について紹介するとともに、「オリンピズム」という言葉から連想する言葉を子どもたちに書いてもらった。
- (5) 「地域性」と「オリンピズム」という2つの要素を組み合わせ、自由に想像を膨らませてグリーンビルのエンブレムをデザインし、作品の交流を行った。

3 成果と課題

本授業の成果としては、スライドに絵やイラストを多く取り入れていたこと、また具体物を多く提示したこともあり、私のつたない英語の説明だけでも子どもたちがこの授業の意図を理解してくれたことである。子どもたちは、「グリーンビルの地域性」と「オリンピズム」の2つの要素を反映し、想像力豊かなエンブレムをデザインしてくれた。また、子どもたちが考える時間を確保し、意見を出してもらう場面を設定するなど子どもたちと関わる機会を取り入れることができたことも成果の1つである。

本授業の課題としては、説明と作業に思った以上に時間がかかってしまい、作品の交流の時間が十分に取れなかったことである。最後にできた作品について説明する時間を設けたが、数人が前で発表するだけで終わってしまった。発表したいと多くの子どもたちが手を挙げてくれていたので、全員で作品を見せ合う時間をとるなど工夫できればよかったと思う。

【自己の変容】

私がアメリカの小学校を訪れて特に驚いたことは、「褒め」の量である。授業中に先生方が子どもたちを褒めることは当たり前で、子どもたち一人一人の発言に対し丁寧に対応していた。このように普段から褒められ慣れている子どもたちの前で授業をすることに、はじめはとても不安だったが、せっかくアメリカで授業をするのでアメリカの良さを自分も取り入れてみようと思い、褒めることと子どもたちの発言には必ず一言コメントを返すことを目標に授業に臨んだ。慣れないことに英語で臨むということは簡単ではなかったが、褒め言葉を使ったり、答えてくれた子に全員で拍手をするように促したりすると、子どもたちがたくさん挙手をしてくれるようになった。日本とは違うからと異なる文化を拒絶するのではなく、現地の文化を取り入れながら授業実践ができたことで、新しいことへ挑戦することの楽しさを知り、これから何事にも積極的に挑戦しようと思えるようになったことが大きな変容である。

第5学年 異文化理解 “Let's Write messages to Japanese school children”

教育学研究科 教職開発専攻 平野 優希

1 ねらい

約100年前の日本とアメリカの桜とハナミズキの贈り合いのエピソードを、日本の小学生とアメリカの小学生の間でメッセージの交換で再現し、日米の交流を体験する。

2 概要

- (1) 日本とアメリカの、桜とハナミズキの贈り合いのエピソードを知る。
- (2) 日本の小学生から贈られたメッセージを読み、日本について理解を深める。
- (3) 日本の小学生のメッセージにノースカロライナ州やグリーンビルのいいところについてメッセージを書く。

3 成果と課題

今回の体験型海外実地研究における成果は、自分の行った授業を通して、実際に日本の小学生とグリーンビルの小学生でメッセージの送り合いという、日米の交流を行えたことである。普段生活している中で、外国に住んでいる人と交流するという機会は多くはない。また、自分たちの国や地域について話し合う機会もほとんどない。そのような中で、授業の中で間接的にはあるが、日本の小学生は日本のいいところについてアメリカの小学生に向けてメッセージを書き、アメリカの小学生は日本の小学生からのメッセージを読み、それに対する返事を書くことで、交流することができた。このことが体験型海外実地研究の1番の成果である。

課題としては、授業の中で児童が発言したり、思考したりする場面が少なかったことが挙げられる。自分の未熟な英語力もあり、児童が発言する場면을授業展開の中から少なくなってしまう。授業時間にも多少余裕があったので、実際に日米間の交流を体験したので、その体験から日米の交流について考え、発表する時間をとってもよかったのではないかと感じた。また、授業の終末部分にももう少し工夫をすべきだった。完成したハナミズキの木を日本の小学生に渡すという説明だけだったので、日米の交流や友好について児童が考えるきっかけになるような問いかけなどをすればよかったと感じた。

【自己の変容】

体験型海外実地研究の中で、アメリカの小学校や中学校の様々な授業や学校環境を観察することができた。この経験から自分の中の「授業」に対するイメージが大きく変わった。現在、日本においてもアクティブラーニングなどが取り入れられているが、アメリカではそれが当たり前のように行われていた。教師がしゃべる場面が少なく、児童、生徒同士のグループで話し合ったり、考えたりする風景が数多く見られた。そして、自由に他のグループに行ったり、自分の考えを主張したりしていた。今まで自分の中には、自分自身が小学生や中学生の頃に受けてきた授業や教育実習で見てきた授業が、「授業」のイメージの多くを占めていた。それらが、授業の型を作ってしまったように感じた。観察した授業の中には、椅子や机のない場所で算数をするものもあった。アメリカでの授業観察などを通して、もっと自由に子どもたちが活動し、学べる授業をしたいと思うようになった。授業はこういうものだという先入観にとらわれることなく、児童のアクティブな活動をより一層取り入れていきたい。

第6学年 異文化理解“Let's think about original local‘ekiben’”

教育学研究科 教科教育学専攻 社会認識教育学専修 茂松 郁弥

1 ねらい

日本の駅弁文化の学習を通して、駅弁に関する理解を深め

2 概要

- (1) 写真等を用いながら、「種類や楽しみ方、町おこしを目的として地域の特徴を反映している点など、「駅弁」文化に関する知識を学習する。
- (2) グリーンビルの食材や特徴的な食べ物を入れた、グリーンビルのオリジナル駅弁を班で考え、絵に描く。
- (3) それぞれで考えたグリーンビルのオリジナル駅弁をクラス全体にプレゼンテーションする。

3 成果と課題

成果は2点ある。1つは、日本の食文化に触れてもらうことの意義である。食文化は直接体験が出来ないが、写真を見せるだけでも、生徒は関心を持って話を聞いていた。これは、「食」という生徒達に身近なものを取り上げているため、食べ物の共通点・相違点分かり、関心や驚きを持って取り組めてからだろう。2点目は、日本の文化を通して自分の文化を見直させられた点である。グリーンビルの駅弁を考えるを通し、「自分が普段食べているものは何か」を意識的に見直しつつグリーンビルを宣伝する駅弁を考えることができた。

課題は2点考えられる。1点目は、知識面の教え方の問題である。駅弁の地域の特徴を反映している側面の説明では、言葉による説明が多くなり、あまり理解できていないようだった。知識を教える際には、分かりにくいからこそ、図やアメリカの事例に当てはめるなどの工夫をし、簡単に理解しやすくするべきだった。2点目は、文化のギャップの埋め方の問題である。本来弁当は、容器に入る量で、彩りやバランスに留意しつつ作られる。しかし、生徒はハンバーガーやピザやチキンといった普段自身が食べている大きなサイズの物を入れているようだった。こうした要因としては、アメリカと日本の食文化の違いが考えられる。和食は、品数が多くそれぞれの量も調節しやすいものであるため、普段自分が食べているものでも弁当にしやすい。しかし、アメリカの生徒が普段食べているハンバーガーなどの食品は、そのまま弁当にすることは難しい。それに留意して単元構想をしなかったことが課題だろう。例えばハンバーガー弁当に固定して具やサイドメニューをグリーンビルの食材にさせるなど、日本の文化をアメリカの文脈に当てはめて考えさせることで、そのギャップを埋める工夫をすべきだろう。

【自己の変容】

体験型教育実地研究を通して、表現力がついたように思う。英語力が拙いこともあり、うまく言葉で表せなかったり、英語が聞き取れず上手く会話ができなったりする場面が多くあった。その状況で、「今の語彙力でどのように言えば良いか」「言語以外で伝える方法はないか」といったことを常に考えながら行動していた。何度も失敗や反省を繰り返して、相手の言葉に対して相槌を入れながら会話をしたり、ジェスチャーを交えつつ言いたいことを伝えたり、表情豊かに話を聞いたりすることで、コミュニケーションをとったり思いを伝えたりすることができるようになった。今まで私は表現することが苦手であったが、実地研究を通してこのような非言語の表現力が高まったように思う

第6学年 平和教育 “Sustainability of World Peace day”

国際協力研究科 教育文化専攻 奥田 麻衣子

1 ねらい

私がこのプログラムに参加した目的は、以下の2点の理由からである。

- (1) 英語で授業をする体験を通し、「教師は、ファシリテーターとしてどのような働きを為すか」という自分への課題を見つけるため。
- (2) ノースカロライナ州から先生が来られた時や「アメリカの教育改革と学校教育の再設計」の講演で言われていた、21世紀スキルがどのように授業の中で実践されているのかを実際に見学したかったため。

2 概要

- (1) 『世界平和の日』について、それを持続可能なものにするためのきっかけを見つける。
- (2) 平和についての考えをクラスで、共有する。問題点は何で、解決策は何かを話し合う。
- (3) 自分自身が見つけ出した問題点をグループで共有し、また、クラスで発表をする。そのようにすることで、平和を持続的なものにしようと思えることができる。

3 成果と課題

本授業実践の成果と課題は以下の通りである。まず、成果としては、生徒にとって図で表記するという作業は、普段の学習から随分と慣れた様子が伺えた。この授業は、案の中でのメインとは、異なったが、この活動は、してよかったと感じる。一方、課題は、山盛りである。クラスの生徒や先生に会うのは、授業が始まる数分前のことだった。それまで、相手の情報が無のままに進めていたのは、ある意味架空のことで、何が授業中に起こってもしょうがないと割り切るしかなかった。自分ができるだけ、冷静でいようと試みたが、クラスの雰囲気とそれまでの先生との関係性から、これらを全てこなすのは難しいと考えた。



【自己の変容】

私が今回、授業をさせて頂くに当たって、授業前の打ち合わせ時間に、受け入れ校の先生たちは、自分が何をしようとするのかをわかってくさっているものだという考えが、非常に甘かったと反省している。そこで、言葉にして表現したり、紙ベースのものを見せたりしながら、確認を一緒にしていき、意見をもらうべきであった。この苦い経験から学んだ経験は、日本に帰ってきてから、非常に役立っている。「言わなくても理解している」と思っているのは、自分だけで、相手が日本人であっても言わなければ、通じていないことがある。だから、自分の思いは、秘めるのではなく、表現することだと学んだ。

また、滞在中訪れた美術館や博物館は、人々にとって身近な場所（生活の一部）なのではないかと感じた。1度だけ訪れたただけけど、また行ってみたいなどというものが多く、時間内で回れないほどの壮大なものであった。身近な存在だがゆえに、それぞれの美術館や博物館では、ゆっくりと休めるようになっていたり、また、これらが宇宙に行きたいなどという子供を育てたりするのではないかと教育は、子供たちを取りまく社会や環境によって、変化もするのではないかと思った。教師として、学校外のことにどれだけ目を向け、子供に発信できるかが問われるのではないかと考える。

第8学年 異文化理解 “Let's play'shogi!”

教育学研究科 教科教育学専攻 社会認識教育学専修 山本 稜

1 ねらい

日本の伝統文化の1つに「将棋」がある。「将棋」は古来よりある遊戯であり、最近ではコンピューターと人が対戦したり、大学の講義で取り上げられたりと注目を集めている。「将棋」は2人で対戦し、勝敗を決する遊戯である。ルールを知っていて、盤と駒さえあれば誰とでも楽しむことができる利点がある。将棋の醍醐味の1つに、相手がどのように動くのかを予想して自分の手を決めるといった戦略を考える力がある。このような力は将棋に限らず、日常生活や他のスポーツでも生かされる力である。そこで、本単元では異文化理解の一助として「将棋」を取り上げた単元を設定し、日本の文化に触れるとともに、戦略を考える力を理解してもらい、その醍醐味を知ってもらうことをねらいとした。

2 概要

- (1) 自己紹介で最初に広島から来たことを伝えた。その次に自分が、ボードゲームが好きであることを伝え、どのようなボードゲームを知っているのかを尋ねて、本授業の関心を高めた。
- (2) 世界にどのようなボードゲームがあるのかを概略し、日本の伝統的なボードゲームに将棋があることを伝えた。
- (3) 将棋について知ってもらうために、将棋のルールを説明し、日本でどのように将棋が楽しまれているのかを説明した。その次に、自分が作成したプリントを用いてそれぞれの駒の動きを確認しつつ、詰将棋という形で、生徒に将棋を実際に楽しんでもらった。
- (4) 本時のまとめとして、将棋はただのボードゲームではなく、戦略を考える力が養われ、それは他の分野でも生かされる力であることを伝えた。

3 成果と課題

まず成果についてである。本授業では、将棋に興味を持ってもらうことと、将棋を通じて戦略を考える醍醐味を伝えることの2点を目標としていた。授業では、生徒の中から「将棋で遊ぶことが出来るの?」といった発言が出たり、グループ活動で生徒全員が将棋に取り組んでいたといった生徒の積極的な様子が見られた。その様子から前者の目標は達成できたと考える。

次に課題についてである。グループ活動で実際に将棋(詰将棋)に取り組んだが、なかなか生徒の手が動かなかった。詰将棋の答えが分かった人を尋ねても、誰も手を挙げなかった。その様子から後者の目標は達成できなかったと考える。その理由として、自分の生徒の教材研究が不足していたことが挙げられる。生徒が一番困っていたのが、将棋の駒の識別であった。それぞれの駒の動かし方を示したプリントを配布したものの、駒が楷書体の漢字で書かれていたため、生徒に困難をもたらしてしまった。本授業から、生徒の教材研究の重要性を改めて考えさせられた。

【自己の変容】

教育観の変容として、生徒の状況を踏まえた生徒の教材研究の重要性を感じたことである。そのためにも、今あるもので何をどのように活用すれば生徒にとって良い授業ができるのだろうかと考えていくことが肝心であると思った。

また、アメリカでは、日本と違うことが多く戸惑うことがあった。しかし、それを受け入れて楽しむ心の余裕やおもてなしの精神の重要性を実感した。グローバル化が進む現代社会に必要であろうそのような精神を会得したいと考え、教師になったら伝えていきたいと考えた。

ような取り組みを行った学生は、日本に戻って再度日本の小学校にメッセージを持ち帰っての授業を行っており、本プロジェクトに参加した学生にとって学びの機会になったのみならず、日米双方の児童にも異文化交流の機会になったことは意義深い。

テーマとしては、豆まきや草履・下駄といった日本の履物、駅弁、将棋などの日本文化を伝えるものから、平和教育、また日米の歴史に基づくメッセージの交換等があった。さらには、本年リオデジャネイロオリンピックが開催され、また次の夏季オリンピック大会が日本で開催されることから、時機を捉えたテーマとしてオリンピックエンブレムの作成を通してオリンピズムを理解し、また、オリンピックで大事にしたいことを考えさせる授業もあった。

日本文化を伝えるテーマを取り上げる者が多かった点においては従来どおりであったといえるだろう。1時間しか授業時間がない単発の実践であることから、コンパクトに取り組める内容を考える必要があり、かつ日本から実習生がやってくるというアメリカの児童・生徒の興味や関心を考え、文化に関するテーマが多くなることは納得できる。しかしながら、文化背景や既知知識が異なることから、日本文化を伝えることは実際には想像するほど容易ではなかったり、ごく表面的なことしか伝えられなかったり、さらには事実でないことを伝えてしまったりする危険性を孕んでいると考えられる。参加学生は伝統的な日本文化からテーマを選択しようとするあまり、今日では触れることのない、学生自身も十分に理解していない文化を調べ、調べたことを表面的に伝えるにとどまってしまうことも少なくない。本当に伝えたいことは何かをよく考えてテーマを選び、授業として展開していくことが求められるだろう。

また、開発された教材を分類すると次のように分類できる。

【日本の文化を体験を通して理解する教材】

A, B, C, F, H

【日米の文化比較を促す教材】

B, C, E, F, H

【願いや思い、夢を引き出す教材】

A, B, D, E, F, G

【深い思考を促す教材】

D, F, G, H

小学校の低い学年においては、実際に体を動かしたり、制作を行ったりすることを通して日本の

文化に触れ、理解を促すような実践が多かった。学年が上がるに従い、思考を伴う活動が増えていき、中学校においては「世界平和の日」を持続可能なものにするをテーマにした挑戦的な授業も行われた。

② 学習指導の成果と課題

実際に授業を行って、学生からは伝えなかったことは何とか伝えられた、日本文化に興味を持って学習活動に参加してくれたといった一定の成果を感じている様子が見られた。しかしながら、次のような反省点や課題も挙げられた。

まず1つ目に、説明が十分にできなかった、あるいは説明が十分に伝わらなかったという反省がある。文化背景、あるいは幼少期からの経験を共有している者同士であれば特別な説明を必要としない事柄も、アメリカの子どもたちにとっては「あ・うん」の呼吸では理解できないことが多いという現実にも多くの学生が直面することになった。授業実施場面において「伝わらない」を体験することにより、どのような説明が必要であったか、その説明のためにはどのような教材や伝え方の工夫を事前に考えておくことが必要であったかなどを知ることとなった。また、説明はしっかりと準備していった学生も、一方的に用意した英語を話すだけになってしまっていて、「理解」に至らせることができなかったという状況が見られた。何を、どのように伝えると良いのかを考えること、そしてそれを伝えるために必要な英語表現を準備することの重要性を認識する機会になったことが伺えた。

その他の課題として、日本の児童と交流を行うような授業を行った学生からは「メッセージの交換で終わってしまった」といった声が挙げられた。また、文化伝達型の授業においては、日本の良いところを一方的に伝えるだけになってしまったとの意見も出された。アメリカでの授業実施の機会が30分～40分の授業1回のみと限られる中で、深い交流や思考を揺さぶるような授業を行うことは容易ではない。しかしながら、このような気づきを得ること自体が、海外での授業実践という体験なくしてはたどり着けない貴重なものであったと考えられ、今後日本で教員になった際に、「では一方的な情報伝達に終わらないためには」や「交流とは何をもって成功といえるのだろうか」を考えられる教員になってくれることを期待したい。

(4) 参加者の「自己の変容」についての考察

例年の参加者と同様に「言語と非言語によるコ

コミュニケーション」と「国境や言語を超えた「人」としての思いやりという共通点」に関して、自己変容につながる学びがあったことが明らかになった。

ほとんどの学生が自身の英語力に不安を感じており、英語で授業を行うことは、自分の英語が伝わるか、児童・生徒の発言を理解して、次の授業展開に結び付けていくことができるかという大きな心配のあるものであったと思われる。この点においては最後まで「もっと英語が流暢であれば」という課題を残した学生も多かったが、一方で、英語ができないからと消極的になるのではなく、「気持ち」でつながろうとすること自体の重要性に気付いた学生が多かった。ある学生からは「言語や文化背景が異なっても、それは弊害ではなく、むしろ知らないからこそその発見や楽しさがあることを本体験から実感した」との感想が寄せられた。参加学生がこのような思いに至った背景には、現地の先生方が自身の時間や経費を惜しみなく費やして、学生のサポートに当たってくださったことがある。言葉や文化の壁を越えて交流することがもたらす喜びや、伝えきれなかった悔しさなどの思いを忘れずに、英語力向上への努力と、他者と関わることのすばらしさを教壇に立った時に彼らの児童・生徒に伝えていってくれることを強く望みたい。

さらに、学生にとっては「イメージ」「固定観念」を良い意味で壊す機会になったことが伺えた。授業とはこのようなものである、という授業イメージを学生は自分自身の学習経験から作り上げている。日米いずれの授業の在り方がより優れているかという問題ではなく、異なる指導を見、体験することにより、既得のイメージを超えた授業実践の可能性を考える機会になったものと思われる。ほめ方、ICTの活用の仕方、思考のさせ方等、日々の授業実践に直結する指導技術等について「生」の実践、実態を学べたことは、これからの授業づくりに大いに役立つものであると考える。

5. おわりに

10年目を迎えた今年の体験型海外教育実地研究も無事に終わり、全員が大きな成果を挙げると同時に、現地での授業を目指して、授業計画から実践を通して、新たな課題を見つけて戻ることができた。ひとつの節目を振り返ってみると、このプログラムに息づいている独自のコンセプトがあるように思われる。第一に、教材開発において誰

もいわゆる「レディメイド」の教材を使わず、すべて一から創り出していく「オーダーメイド」の教材づくりを目指したことである。近年では教科書や市販教材だけでなく、インターネットをはじめ、至る所に教材資料はあふれている。それをそのまま使うのではなく、自らの視点で改作しつなぎ合わせ、手作りの教材づくりを図ってきたことは、本プログラムの伝統となっている。教材づくりの原点に立ち返り、アメリカの子どもたちにどうしたら受け入れられるかを常に考え、また英語という高いハードルを何とかクリアしながら、教材や活動を組み立てていく取り組みは、多様化する日本の教育環境の未来に適合するための力になるであろう。

第二に、教科の枠組みを超えた取り組みとなっていることである。参加した大学院生たちは、それぞれ社会科、理科、美術科、などの専門教科を持ち、教材研究にたけた集団である。それにも拘わらず、敢えて自らの専門教科を教える (teach a subject) という枠組みを越えて、思考を揺さぶり深めるような活動を通して教科知識の伝達に止まることなく、教科知識・技能を活用、援用した学びを促進すること (do a subject) を目指したことである。これは現在、脚光を浴びている知識注入から能動型教育を目指すアクティブ・ラーニングや、内容言語統合学習 (Content Language Integrated Learning 通称 CLIL) の方向を先取りしたものと言えよう。

今後、本プログラムが既存の教科の枠組みや教科観を残しながらも、新たな教材や教育プログラムの開発に果敢に取り組むためのステップになることを期待したい。

最後に、このプログラムを支えてくださった多くの同僚と友人達に深く感謝したい。まずは、アメリカ合衆国ノースカロライナ州での受け入れ側であるイーストカロライナ大学サンドラ・ウォーレン先生には7月の広島大学でのフォーラム及びワークショップ参加、そして9月の実地研究の受け入れと、それに伴う現地教員とのパイプ役として、まさに滅私的なご協力をいただいた。広島大学との交流にかける熱い思いとご尽力がなければ、10年間の歩みは途切れていたことであろう。また、彼女の呼びかけに快く応じて、南部州のホスピタリティで私たちの訪問と交流を歓迎してくださったグリーンビルとローリーの学校の先生方そして生徒達にもお礼を申し上げたい。このような交流の礎になったのは、かつて広島大学教育学部に留

学され、その後、イーストカロライナ大学に赴任以降、ずっと教育を通じた日米交流にかかわり続け、太平洋を教育という橋でつなごうとして志半ばで倒れた故ドン・スペンス博士の願いであった。広島大学 GPSC は小原先生をはじめ各メンバーとスペンス氏との小さなフレンドシップから始まり、10年を経て太いパートナーシップに成長した。今後は、このプログラムを体験した若き教育者たちが、日本さらには世界各地で教育のリーダーシップをとることができる人材として活躍されることを願ってやまない。

〔参考文献〕

- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻, 2007, pp.43-56。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻, 2008, pp.39-53。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp.95-104。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, p.155-168。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅴ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻, 2012, pp.129-140。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅵ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻, 2013, pp.259-269。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅶ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第20巻, 2014, pp.161-181。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第21巻, 2015, pp.143-161。
- 深澤清治・小原友行・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅷ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第22巻, 2016, pp.251-268。